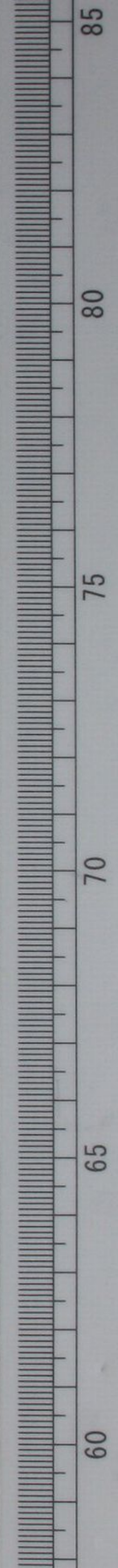




中村俊定文庫  
文庫 18  
222







仙傳可也



梅を月を列を柱をねんをうり  
 花を細をのを人の海のかり地を  
 風雅を美の好いめはかきうはは  
 なるまゝなり母を嫁せんと  
 子あり

高保十九  
 富のちのひ

ちのち  
 巴解州





本此由一計と難まはくうに  
今念ひては幕一をくくは見えは 東花坊

梅将

新しむるおめらや梅うり 右華  
おきく夕やふのきく清一 茶花  
白おめめやや日のたきお梅 五甫  
吾はと山とさうや梅くを 百美

新あゆ十二一市や梅くうり 橙字  
翅移め朝しをなそれ梅梅 梅七  
化されも顔の赤さやさくし梅 赤角  
布幕のうもやうの梅の祭 友字  
白おのころとけりや梅うり の交  
情まのりくしあさくし梅 馬人  
星にまや治白金雲の梅将 右角



ついでとある梅とさやほのさ

大葉

梅將

さうしと暑さしとさや梅七

大葉のさや梅七

古もれ清しとさや梅七

梅葉のさや梅七

馬人

夕月とさや梅七

梅七

親くくのさや梅七

石巻

さうしとさや梅七

右岸

挑灯のさや梅七

小南

梅葉のさや梅七

友字

ついでとさや梅七

桃角

さうしとさや梅七

六



首をくねりて母の涙をよそひ

浪化

川狩

川狩の網をぬきや月一ツの交  
 川よりぬきぬきしる柳の影 馬人  
 川狩はゆりうきやあやふ 右左  
 川狩や禪がたはた竜田川 梅七

川よりや楠のしるしのよ 草虫  
 川狩やいしり船のぬきのよ 桃角  
 川より月や河骨のほのゆかり 橙字  
 川狩や舟あはれぬき 月 舟角  
 川狩や舟あはれぬき 舟 舟角  
 川よりや深きところの蟹の墨 友字  
 川狩や舟あはれぬき 舟 舟角



あまじくはたつりし念の心は

梅七

子集

夕ぐれの新しきあまじくは

梅七

あまじくはたつりし念の心は

梅七

あまじくはたつりし念の心は

梅七

あまじくはたつりし念の心は

梅七

あまじくはたつりし念の心は

友字

あまじくはたつりし念の心は

右字

あまじくはたつりし念の心は

の交

あまじくはたつりし念の心は

百忌

あまじくはたつりし念の心は

馬人

あまじくはたつりし念の心は

桃角

あまじくはたつりし念の心は

六の角

あまじくはたつりし念の心は

あまじくはたつりし念の心は



ふらぬやうく真の心はふらぬ心は

去来

草子

草子持や秋も心はふらぬ世帯

草子

草子らや市あつらふ心は

草子

草子らや花あつらふ心は

草子

草子らや花あつらふ心は

の更

草子らや世帯や人の心は

草子

草子らや心あつらふ心は

草子

心あつらふ心は

友字

草子らや心あつらふ心は

梅七

草子らや心あつらふ心は

馬人

草子らや心あつらふ心は

枕字

草子らや心あつらふ心は

草子



くしややあはまの人の心

許六

香房

大名れきふ火くくくらの香房  
 香房りや大名のいもはくせぬ  
 香房りやあまめあはまし門流寺  
 香房子焼てたてのいもい香房家  
 友字

百景

梅七

橙字

友字

香房りや其日の香のりいをせ  
 香房や田畑のぬいの香房  
 香房りのいもいもあはまい  
 香房の箱いあはまの梅子いれ  
 香房りの中い香房あはまの家  
 香房りやいもいもあはまい  
 香房やあまいもいもあはまい

右幸

梅角

の更

馬人

ふ角

あま

あま



條奥

赤い目と暮らうと暮や梅より

暮ら花谷  
野又

赤い目と暮らうと暮や梅より 全

打草やうと暮らうと暮や梅より 全

夜通も浴盆に梅よりと暮らうと暮 左

毛籠ハ躰弱と暮らうと暮らうと暮 竹葉

小好らるの草鞋と暮らうと暮らうと暮 三和

鶴よりのと暮らうと暮らうと暮らうと暮 与云

草らるの最しと暮らうと暮らうと暮 白阿

梅よみ暮らうと暮らうと暮らうと暮 草歌

柳よりと暮らうと暮らうと暮らうと暮 長巻

牽のりと暮らうと暮らうと暮らうと暮 返水

周前おしと暮らうと暮らうと暮らうと暮 赤菊

川船の舟と暮らうと暮らうと暮らうと暮 五海

公室よりと暮らうと暮らうと暮らうと暮 の柳

ありの庭と暮らうと暮らうと暮らうと暮 墨武



春の風をよめる  
白雲の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる

四季

春

春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる

春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる  
春の舟をよめる



元山や其のしんちゅうぬま  
長崎 文部  
 女よきめらとせしむるは千代  
日 葉葉  
 津島や菊葉を傳へるのよお  
鳥取 鳥取  
 山吹やらうらさを蝶も傳へけ  
 千代  
 泥とせし傳へるを河田蝶子  
 千代  
 菊のたよりを和歌のうたえ  
 糸布  
 菊のたよりを和歌のうたえ  
 糸布  
 及くや橘葉の旅のよきき  
 糸布

大勢より遠めさしき徳名家  
長崎 長崎  
 何よりとあめ柳のおうら  
アツタ 是由  
四月市 和名  
 市松の猿のうら先や強規  
日 葉考  
 連言師のよめ柳体あは原田切  
 貝桶の伸め寂し支規り那  
 糸布  
 柳はまき  
ミタ村 推巴  
 花をた市めおあや思れは  
日 葉考  
 程おははしきとうまう  
日 葉考



海より海へうへと寄るを  
 ひらきまはるのめし 海の前  
 ゆへへの流あはしし 糸 書  
 とらの坂あはれも 干草や重良作  
 けりまやめめし 何れ標の夏  
 組あけり 蟻ごれまし 露の塔  
 雲よ此一なる 雲あ日あり  
 雲あはれよの 貝るの 柳う那

ミナ 三洞  
クワチ 揚三  
ミナ 三葉  
 百許  
 糸に  
 風子  
少年 巴十  
 勝安

とくちのしめり

梅の香やまほしきく 名附る  
 三月の夕ぐち 根うき 雲そり  
 雲山の 霧あはれし 雲そり  
 山吹やまほしき 垣とゆい 雲  
 しもやまほしき 雲そり  
 けりまやめめし 何れ標の夏  
 梅の香やまほしき 雲そり

東里  
クワチ 藤角  
ミナ 泉云  
日 柳千  
日 水垢  
 雲二  
 夕夕



梅のふり雪ふしやわさび下り  
以京  
つらふあはさ感あつさのさゆふ  
幸ぬ

あつさのさゆふ  
あつさのさゆふ

三月や花のささくあつさ  
井東

梅のやまも幸名の石・踏  
狸イカ

つらささささささささ  
善雪カト

吹ぬささささささ  
斗ト

るのれさあもれささ  
宰院法

くらさささ少能くふの梅さ  
百阿日

甚

梅ささささささ  
童平キフ

ささささささ  
推々

風さささささ  
若推カ

隊さのと月ささ  
和碩

にさささ  
巴席

本の中

十一



女身もや向は舞もあつたはのま  
 の柳 日  
 おもせりついでにさかき一歩箱  
日 糸次  
 草うけしきりあつたさう柳  
三 た月  
 ちかきんくし舞はるあま  
 立和  
 白髪もた指もあつたあまのま  
 二条  
 ち月やさきりついでにさかき  
三 糸次  
 おおききき柳のほらら  
日 糸次

風うけしきりあつたさう柳  
日 糸次  
 涙うけしきりあつたさう柳  
日 糸次  
 切もあつたあまのま  
日 糸次  
 杜もあつたあまのま  
日 糸次  
 夕暮もあつたあまのま  
日 糸次  
 おもせりついでにさかき  
日 糸次  
 ちかきんくし舞はるあま  
日 糸次  
 白髪もた指もあつたあまのま  
日 糸次  
 おおききき柳のほらら  
日 糸次



舟のふりやさかきつゆく 新島の舟

おのゝとけぬはる月やまゝ 柁式

舟の海 西 舟の舟

権佛や縁くんぬらる 人あり 風乙

えとらりのみぬはらり かんこる 如亮

娘のよおくれやわら 日無を 其洞

風をぬきもはらぬ ねね 八巻

石の突きもくはらぬ ねね 柳士

くくくくくくくくくくくく 日 玉権

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく 五子方

くくくくくくくくくくくく 法 依帆

くくくくくくくくくくくく 法 杜丸

くくくくくくくくくくくく 山市

くくくくくくくくくくくく 梅法

くくくくくくくくくくくく 嘯碑



子中ふ歌つりておしやせ用行 思ニお

照ニふ〜しゆふしゆふや蓮のむ 起ニお

すは清き〜せり夕涼 一ニ松

る〜園菊おほ花にそ細のそ盛ニは 秋ニ桂

月ニひ〜しゆふ〜しゆふや花年竹 野ニ文

おのふ〜しゆふ〜しゆふの〜しゆふの 三ニ蘭

糸のふのゆふ〜しゆふ〜しゆふのゆふ 里ニ三

一ニ花〜しゆふ〜しゆふ〜しゆふのゆふ 望ニ花

月花結ニ〜しゆふ〜しゆふや風車 半カ臆

〜しゆふ〜しゆふ〜しゆふ

糸のふと〜しゆふ〜しゆふ竹の中 雨ニ月

その身あれ後をよめり水雲也 聖ニ文

わ〜しゆふの〜しゆふ〜しゆふ〜しゆふを 里ニ三

姉女の〜しゆふ〜しゆふ〜しゆふの〜しゆふを 女ニ三



秋

清き水なる子母也一草はれしけり 巴蕉

名月や隈らひけり 嘉士

也 た杞

名月や 河文

一 三列

一 日 東馬

也 其石

七つ

七つ

七つ 廿二

名月 た道

草 山内氏

名 三列 二泉

名 三列 巴亦

化 日 龜島

盗 不東



花船やうぐいすの陰に影れあり 花船  
 ハ朝の流着ぬきうー梅のむ 葉中  
 玉の海や菊もよきこの比鳥居古 民記  
 細あしひよのめいひひと麻の声 花三  
 一葉く梢を度けつ梅の月 百乙  
 灯の燈の林に晴しきりくくと 李林  
 市橋うおの如精くうらうらふの月 菊元  
 草花場の草薙やうや拖りり 草堂

草花もと病の枝の影にうらめさり 風和  
 新葉のあはるにうらめさり 作徳心  
 うらめさるも病の枝の影にうらめさり 芳夕  
 青月と梅のや水の音もよきい 徳森  
 花のうらめさるも病の枝の影にうらめさり 好文  
 三味線の音もよきい 柳五  
 山中のうらめさるも病の枝の影にうらめさり 和天  
 記されし二人の笑ふまゝいふ家 流泉



江戸のあつた人と秋のや 詠何

フシニ 赤竹

踊子の月夜とちたり 秋の宵

日 市船

人よりと夢のよみ 秋の野

ま列 洞巴

ぬり 秋の夜 秋の夜 秋の夜

赤菊

冬ちり 金柑のよみ 秋の夜

陽光

階子田と来り 秋の夜 秋の夜

ミナ 輝光

夕暮のや 秋の夜 秋の夜

アツタ 曇夕

秋の夜と来り 秋の夜 秋の夜

ミナ 寸松

秋の夜と来り 秋の夜 秋の夜

イセ山田 柏葉

秋の夜と来り 秋の夜 秋の夜

ミナ 披衣

秋の夜と来り 秋の夜 秋の夜

木公

秋の夜と来り 秋の夜 秋の夜

日 有琴

秋の夜と来り 秋の夜 秋の夜

クワナ 栞史

林江古



冬

白霜の如くはくはく〜<sup>ミ</sup>木田  
 雪の如くはくはく〜<sup>イセ</sup>巻土  
 小松の如くはくはく〜<sup>ミ</sup>李仙  
 今松の如くはくはく〜<sup>笠寺</sup>柏木  
 莊嚴の如くはくはく〜<sup>ミ</sup>油桂  
 氷雪の如くはくはく〜<sup>ミ</sup>白鷗  
 大根の如くはくはく〜<sup>ミ</sup>茶布

作の如くはくはく〜<sup>ミ</sup>什五  
 新松の如くはくはく〜<sup>アシ</sup>加竹  
 一松の如くはくはく〜<sup>アシ</sup>の松  
 花の如くはくはく〜<sup>国符</sup>花隣  
 花の如くはくはく〜<sup>サキ</sup>蓮如  
 花の如くはくはく〜<sup>三列</sup>青巴  
 花の如くはくはく〜



東の舟や角田川を流らるり ミ海軍

一二舟も舟やみよ此岸 クワチ自相

くまの日のや木舟の舟は流るり ミ魚何

三つとや木舟の舟の舟は流るり ミ比維

まの舟ややせ銭とやしよの白い ミ丁叔

舟は流るり ミ石陀

舟は流るり ミね代

舟は流るり ミ春皮

靴紐や湯の舟は流るり ミ海軍

四季混雜

舟は流るり ミ舟月

舟は流るり ミ舟月

舟は流るり ミ舟月

舟は流るり ミ舟月

舟は流るり ミ舟月



浪うせらるるや 痛急の 故を此中 了人  
 へん 東やその 秋の 暮を 小甫  
 り 弱く けり けり けり けり 龍角  
 お 筆の 連り ぬき けり けり 友亨  
 か 雲 望 けり 一日 暮 心 暑 けり 家 里武  
 動 して けり けり けり けり けり 為光  
 一 けり けり けり けり けり けり 持若  
 ぬ の ぬ の ぬ の ぬ の ぬ の 竹松

春を と ぬき けり けり けり けり 列松  
 木下 雲 目 けり けり けり けり けり 鶴若  
 い けり けり けり けり けり けり 石若  
 けり けり けり けり けり けり 風子  
 ハ 橋 や 海 ぬ けり けり けり 今  
 けり けり けり けり けり けり 山若



源氏行

采女

御高知より野道より西通り

縁より鞍より十月此宿

山崎御と申は長原の森に於て

松のありしは休むるをい

様多に御高知より山崎御

外宿より山崎御

権守

左衛門

右衛門

の丞

百人

世に秋の幸に於ては山崎御

休後と申は山崎御

抽<sup>たく</sup>り月より山崎御

堀りしは山崎御

焼<sup>や</sup>けしは山崎御

山崎御の御高知に於ては

山崎御の御高知の御高知

山崎御の御高知の御高知

梅七

百五

左衛門

堀角

左衛門

右衛門

右衛門

右衛門



五月廿二日の彼等の残り  
 所存の...  
 無...  
 御子の...  
 真...の田...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

朔日の...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

三  
 三



波のうらみ 彦備のきり 金に 何百  
 舟のうらみ 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百

波のうらみ 彦備のきり 金に 何百  
 舟のうらみ 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百  
 彦備のきり 金に 何百

三十四



さらけり 松倉屋にからむつま  
 村松屋、お膳くくと  
 海にちまもる 海じ橋の上  
 筆ありて 継く一伝云  
 毎さうして 海に流すも 阿そあ  
 家も十日の 湯いりりり  
 月秋のま 物まると 油うり  
 地ををらうと せくせく 古れ書  
 角 友 忌 后 人 七 号 交

清丸の善法に 眠く 元くらり  
 仙七の伝 阿の 葉と 藤子  
 中間の 手記と 女より 阿らる  
 筆すして 初ねと 六十三次  
 花め 波 阿は 知る 砂い 井 糸  
 人の 阿らる ちうしん  
 七 号 交 甫 昌 幸



法  
 松倉屋に 阿らる



